

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	就任の辭
Author(s)	栗林, 卯平; 中村, 重喜; 北村, 直躬; 陶山, 喜六; 中村, 靜
Citation	龍南會雜誌, 146: [i]-[ii]
Issue date	1912-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6344
Right	

就任の辭

歲華徒らに流れて止まず。文明の潮流幾度か轉する、所人間の夢想、空しく現實の暴露に破れて、痛恨と悲痛の涙を相灑ぐ。げにや、美はしきものを美はしと見しは束の間の夢なりしか。嘗ては野に咲ける一本の花に涙を注ぎ、空に懸れる虹に驚嘆の眼を躍らして、吾が心未だ若しと轟く血汐の高鳴るを禁じ得ざりし者を、理想の樓閣忽にして碎け、殘されたるアルカディアの上に、失はれたる驚嘆を徒らに思慕し、求め得べき者を求め得ずして、其の歸趣に迷ひ、紫痕斑々たる心の上を蓋ふ者は、懷疑、不安、衰頹との悲なり。窮迫せる因襲を破り、解放せられたる自己に對して、徹底せる生を自覺し、奔放なる感情を思ふと雖も、科學は絶對なり。自然は人類の勝利者なり。運命の前に額付き、宿命の裡に、心を亂して、眞、善、美の三者は扶搖を搏つて高く姿を沒せり。かくて吾々は光榮ある人生の首途に迷ひ、醜き現實の上に慟哭せり。

渾沌紛糾懷疑は今の世相の全般にあらずや。「零落」と「諦」之れやがて、人々が行ふ可き必須の區分なりと雖も、自ら求めて、爲し得ざる者は到底永續すべきにあらず。あゝ現代に誰か、宗教と言ひ、信仰を求むる。偶像を以て絶對と信じたるは創世紀の夢なり。哲人日に遠ざかり、高士世に沒して、幾多の傳道者は、迷へる小羊の群に、熱血の旗を高く掲げ、義憤の響を高く洩らせども、一度金權と政權とを彼等の胸より奪ひ去れよ。冷き物質と云ふ形式の下に、一切の權威は悉く光を奪はれ、傳道者は依然たる傳道者なり。迷へる者は依然として迷へり。かくて肯定と否定との間に吾々は一切の事物を失ひ、中心の欲求は、遂に、他力を否定し、人は自分自らの力に依りて、生く可きを教へられぬ。然も、「如何にして生く可きか」之れ遂に問題な

り。生は人間の第一義にして、宇宙萬法の存在に對し、相對的に、「吾」と云ふ存立現象の頂点なり。古き道徳を否定し、古き因襲を打破し、分裂と矛盾とに亂れたる古き自己を捨て、新らしき人生の旅路に、正義と權威とを楯として、新らしき自己を作らむ。戰は吾等の前に開かれたり。局面の轉化は忽焉として展けた。有無の認識を超越して、直に理想の直觀に合し、一切の偶像的崇拜を破壊して、絕對的自我的建設に勉めむ。吾々は科學の謳歌者に非らず。又、神の讚美者に非らず。然も吾々は依然たる戰の人なり。内省の苦痛に堪へざるの人なり。

今や吾等、誤り選ばれて雜誌部に任を辱うせり。思ふに、吾等の淺才と無經驗とは、龍南の思想界を鼓舞し振作するに就て、何等の價值と功績とを容れざる可し。思うて此所に到れば中心自ら快しとせざるも、吾等の歩む可き道は定れり。權威と自信、之れやがて一切の描かる可きものを描きつくす、光榮と戰との叫にあらすや。

暮春の綠、山々を罩めて、白水の調、轉た急に響く所、衣袂の細雨濃かに灑ぎ、楊柳を捲く風亦寒からず。あゝかくて、人は年毎に老い花は空しく逝く。我等も寂しき心の胸を抱きて亦自らの道に生きなむ。

雜誌部委員

栗	林	卯	平
中	村	重	喜
北	村	直	躬
陶	山	喜	六
中	村	靜	

明治四十五年五月十日